

スポーツ博物館将来構想検討会議（第4回） 議事要旨

日時：平成30年10月24日（水）10:00～12:00

場所：日本スポーツ振興センター本部事務所 大会議室1

出席者：【委員】黒川座長、井上座長代理、泉委員、寺澤委員、前田委員、來田委員

【オブザーバー】 スポーツ庁 鈴木政策課長、JPC 中森事務局長

【JSC】大東理事長、小菅理事、今泉理事、河村スポーツ博物館長 ほか関係職員

議 事：

1. ヒアリング（山本浩 法政大学教授）

「スポーツ博物館に期待する今後の資料収集と博物館の在り方」についてヒアリングを実施。（資料1）
山本浩教授から意見発表後、質疑応答。

2. 本検討会議の「審議のまとめ」素案（案）について

事務局から資料2について説明し、質疑応答。

[1 ヒアリングの主な内容]（山本教授）

- ・時代の要請の中で、スポーツ博物館をどう形づくるか、「社会が何を求めているのか」、「われわれはそこに何をもちたらしめるか」、「そのためには何が必要か」ということを問いかけている。
- ・博物館が、過去の歴史だけで勝負するには限界がある。スポーツには栄光の過去もあり、常に前進する「今日性」もある、これが他の博物館とは大いに違うところだという認識が必要。
- ・世界のスポーツは、若い人たちがスポーツに無関心となっていること、行き過ぎた勝利への執着、「差別」という3つの問題・危機感に取り巻かれている。これらの問題にある種の解決策、手がかりを、スポーツ博物館が助力の手を差しのべることができるのではないかと考える。
- ・「無関心」への対応としては、IOCはユースオリンピックの創設や若者に人気のスポーツの採用など若者を取り込もうと取り組んできた。
- ・勝負の狭間に何があったのか「博物館だけが知っている」ものを世の中の人たちに知らしめたい、というのが一つの目標。実は勝負は最終的に「敗北」が多く、落胆・不満がたまりやすい背景がある。そこで重要なのがコミュニケーション。スポーツ博物館は、このコミュニケーションに関して貢献できるシステムの中心にあると考える。
- ・「差別」の問題については、競技というものに資料を加えて、スポーツの見識を変える時代にきていると思う。スポーツ博物館の力でさらなる高みにあがることができると感じている。
- ・林前文部科学大臣が「博物館資料を次世代に継承する観点とのバランスに配慮しながら、社会のニーズに応じた博物館づくりを一元的に推進していく」と、社会のニーズがあれば博物館を変えられるという趣旨の発言をしている。われわれも既存のアイデア、構想にとらわれることなく、大きく前に進むことを検討していくべきでないか。
- ・これまでのスポーツ博物館が持っている宝は、一つは「収蔵品」、二つ目は学芸員・職員の方々の持っている「知識」。三つ目は、「働く人」。これらをこれまで以上にどう力を発揮できるようにするのか、それがこの委員会にアドバイスを求められているものの一つだと思う。

- ・博物館の収蔵品量は「過去」の資料が少なく、「今」に来ると増えていく傾向と考える。過去の収蔵品を増やすために、戦後 75 年が経ち、75 歳前後の人が持っている文書や VTR など思い出の品が手放されるのを機に、これらの「市井のスポーツ財産を見積もる」ということがスポーツ博物館にできないか。書籍、道具を評価し、買取をする、もし重複していれば一部販売するなど、評価によっていろんなことができると思う。
- ・スポーツ財産を集めるためには、過去にサポートや準備など大小にかかわらず大変な仕事をしたいいろいろな人にインタビューを取りに行くのは、スポーツ博物館がやるべき仕事ではないかと思う。
- ・スポーツ財産を常に積み上げることが大事。現在の収集、既存の収集の下支えとなる過去の財産を全国に募ることを進めてほしい。
- ・新たな組織が、「教育機関」であり「博物館」でもあって「シンクタンク」でもあるという形が取れないかと期待する。スポーツ博物館がシンクタンクの働きをすると、世の中に大きなインパクトを与える可能性がある。
- ・2020 年の向こう側に「用具」、「資料」や「思考」で、スポーツをめぐる「思索の小宇宙」みたいなものを、スポーツ博物館がまわしていけないか。スポーツを通じた英知の交流が、各大陸の各国の博物館との間でかわすことができると期待をしている。

[1 ヒアリングに関する委員からの意見]

- 「思索の小宇宙」という表現について、もう少し詳しく教えてほしい。
- 我々が持っているスポーツの過去の歴史、流れを論理化して、それを我々の共有の財産として、スポーツの教育やスポーツの啓発に使う。それを上手くやっているとシンクタンクになる。物を並べて見せるのは主ではなく、そこから何が見えてきたかを、来た人たちが考えさせられる、そういう世界にしたいと思ふ。
- 今まで日本は「する」「みる」「支える」の 3 本の軸でスポーツを語って来たが、「知る」、「考える」、それを作るための場所にミュージアムはなると良い。
- 「人が集まる」ということがキーワードになる。作ればいいのではなく、何を求めているか、何をこれから将来に向かってやっていくのかというのが非常に大きな課題。
- スポーツ界で暴力的な指導の問題が繰り返されているのは偶然ではないと思っている。過去の歴史の中で、どういう取組があったか、学校の先生やクラブの指導者が悩みながらスポーツ博物館に来て、ヒントを与えられる組織になってほしい。我々の持っている多様なものがすべて同じ方向から来ているのではないということを知るためにも人に来てもらって、それを知ってもらうということが大事。
- スポーツの多様な価値を知らない人が多く、価値を国民に伝えていくという意味で、全国から眠っている資料を集めるというのは良いと思うが、価値をどうやって伝えていくか難しいと感じる。
- 「収蔵品」「知識」「働く人」の 3 つの中で、「収蔵品」のための収蔵庫と職員（「働く人」）のための諸室について議論はなされていたが、「知識」のための諸室について、具体的なイメージが難しい。今後、この知識をこの施設の中でどういう形で蓄積し活用するかによって、必要な諸室の床面積が見えてくるという印象。
- 施設について、今回の議論の中で出てきた広さでは無理。他方で資料の展示場所と研究の場所が一体でないにだめだという考えがある。単に見せるだけの博物館から、「思索する」という方向に持っていき、狭い展示をする場所を軸にして博物館を考えるのは無理という気がする。また、資料の売買という新し

いことをやっていくには、公的な組織では窮屈では。「一般財団法人」が良いなど組織論を考えていかないと。

- 「スポーツ財産の価値」をいかに作っていくのか、その価値を作り出すのが学芸員の役目である。博物館が現在の社会において求められているのは、社会的シンクタンクになることで、それが博物館が常に前進する今日性というものにつながっていく。さらに重要なのが、この社会の中で博物館が持つコミュニケーション能力の重要性がクローズアップされることだと思う。
- スポーツの価値を伝える社会が未だ出来上がっていないと感じる。勝利の裏にはたくさんの敗北があり、そこにある課題に対してチャレンジしていくことにスポーツの価値がある。価値が見えてくると博物館などでより深く調べたいとか、考えたいとなる。自分を見つめながら自分で考えて課題を見つけ、さらにチャレンジしていく。その生き方そのものが、人間の生き方につながると思う。
- 行政の立場ではスポーツを「する」「みる」「支える」をキャッチフレーズにしてやっている。本当の意味で価値というものがどの程度広く共有されているのか、認識されているのか、改めて立ち止まって考えることも必要だと思う。そういう意味で、シンクタンク的な役割、スポーツの価値を「知る」「考える」仕組みをどこかに組み込む必要があるのかなと感じた。
- 「スポーツの財産化」が物凄く大切だと感じた。また、スポーツ文化として、スポーツ庁と文化庁が一緒になって考えていくことが必要。いつの時代も博物館の役割は、財産をきちんと公開し、知らしめていくことであると思う。

NHK が川口に持っているアーカイブスの構想がどういう形で更に進化していくのか、もしお分かりになっていたらお話し願いたい。
- 川口のアーカイブスは個別の映像にいろんな情報を紐づける作業が多忙になっている。映像が非常に増えてしまったことが要因の一つ。一方で、過去の映像はほとんどない。そこで、全国に向けて映像資料の提供を呼び掛けているが、一般家庭の方が撮られた映像はそのまま放送に使えないので、それを一つ一つデジタル処理をしていくのに時間もお金もかかるという状況。アーカイブスは我々が外から想像しているほど豊かな映像資料はないのが現実である。
- NHK の特定の場所に行かないとアーカイブスを見ることはできないと聞くが、近い将来、国の機関であるスポーツ博物館とのネットワークとして、解決していくことができるか。
- 可能性は大いにある。必要であれば担当の者を呼ぶことは可能。
- 将来構想の中では様々な機関とのネットワーク構築が出てくるので、NHK の力も借りていく必要があると思う。是非サポートをお願いしたい。
- 「考える」「思索」「英知の交流」のようなビジョン、哲学というのが大変深くて素晴らしい。現実とのギャップをどうやって考えていくのかは難しいが、概念的には参考にさせていただきたい。
- どこの博物館でも主な収入は入館料になるが、運営費、人件費を含めると博物館単体で収支が均衡することはあり得ないと思う。金銭的収入の他に博物館が金銭換算できない見えざる価値を産んでいることを世間には理解してもらうのは難しく、説得力のある見えざる価値を表現することができればスポーツ博物館の存続理由となる。しかし、金銭的な価値に重きを置くと設置のための予算措置のハードルは高い。
- スポーツの財産を金額で表示して、それをスポーツ博物館が全部買い取る必要は無い。一方で価値があると知られないまま捨てられてしまうということに対して、我々は何とか歯止めをかけられないかという感覚でいた方が良いのでは。

- いわゆるスポーツ図書館は日本にあるのか。スポーツ図書館があれば、全国各地、世界からもいろんな資料が集まると思う。
- NPO 法人「体育とスポーツの図書館」というのが愛知県にあり、大学で廃棄されるスポーツに関係する本などをできるだけを集めようとしている。もともと研究者の中村敏雄氏の蔵書の中核としており、民間なので一生懸命賛助会員が支えている。
- そのような図書館があればいろんな資料が集まって来るのではないか。
- 地方に分散でも良いのであると良いと思う。

[2に関する委員からの意見]

- スポーツは多様化しており、すべてを学校教育に依存して、体験する、知る、伝えるのは困難である。スポーツ人口を減らさないなど、スポーツ全体を支えるためにもスポーツを「知る」・「考える」場所になることをコンセプトに加えたほうが良い。体罰や暴力といったイデオロギーの部分も含めて必要になる。
- 全体としてメッセージ性が弱い。「スポーツの価値」や「スポーツの財産化」などを具現化するのがスポーツ博物館であるということをメッセージとして置くべき。それは、ただ資料を並べるだけではなく、知らしめて考えさせることであり、それには「データ」に意味づけをして、「情報」にしていく学芸員が重要。学芸員の価値がしっかり認められないと良い博物館はできず、財産化もできず、収入も上がらないということになる。
- スポーツ博物館は若者がスポーツに触れる場になれば良いと考えている。一番重要なのは中学生や高校生で、スポーツ博物館でスポーツに触れ、自分の競技力が高まったり、競技を深く追及したりするという場であれば、修学旅行などの教育の場に使えるのでは。また、子供がスポーツをしている親がスポーツを学ぶことが出来る場であると良い。利用する対象によって来てもらえるような区分けができればよい。年代を意識したものを、コンセプトに入れるか、収集保存のところで対象を区別した考えがあっても良い。
- 「健康」が今後の博物館の中で大切なキーワードになると思う。若い人もお年寄りも健康になるためのことを知ることができるような、一つの物語ができれば良い。
- 事業内容で、資料の収集・保存の中に、民間保有の情報を収集して統合する機能を入れたらどうか。全てを受け入れることは、無理だが、その情報をきちんとデータ化していくことは非常に重要。スポーツ博物館で評価基準を設け、登録制度を率先して作り、「登録された資料」という登録証を発行するだけでも、捨てるときに連絡が来て、委員会で保存やデジタル化したうえで廃棄するなどのプロセスができる。また、調査研究の中に、何がスポーツ専門博物館ならではの財産なのかを検討する機能を入れたらどうか。例えばトップアスリートの身体データや競技のルールなどはどうなのか、何をデータと考え、何を資料だと考えるのかを常に議論していく必要がある。
- 項目の中に運営形態という項目はあるが、全体の博物館の体制というものが抜けている。体制はしっかりするべき。
- コンセプトの中で、ネットワークは大きなキーワードになっている。交流の中に、ネットワークに入ることの可否も含めて、相手先の収集方針や所蔵内容などの確認することを入れたらどうか。これからスポーツ博物館の収集方針を決める場合は、役割分担がわからないと方針が固められないため、第一フェーズに少なくともネットワークに入るだろう機関の状況調査を入れるべき。
- 資料2の段階的整備イメージについては、フェーズ毎にロードマップを示し、目途を決めて再開館を

いつとするか、いつまでに何をやるのかを議論していく必要がある。

- ロードマップを含めて、具体化して行かないと議論が進んでいかないので、ある程度示すべきではないか。
- 「スポーツの本来の価値」と「スポーツ文化財としての価値」との違いを分けて考えていくべき。スポーツ基本計画のもとにスポーツの価値というのをしっかり捉えて、混同してしまうと非常にわかりにくくなる。
- 「スポーツの価値」とは社会的な価値なのか、個人にとっての価値なのかが混同している。
おそらくスポーツ博物館では、「スポーツは社会において、このような役割を果たすから大事だ」というものを示すべき。スポーツがどういう貢献ができるのかを示すことで、社会から「スポーツは大事だ」と思われる。それが「スポーツの価値の具現化」ということであり、まさにコンセプトであり、そういうもので収集方針や調査研究などのデータの作り方は決まってくるのだと思う。
- 設置する意義の中で、JSC が主体の部分と JSC だけでなく国全体でやる部分というのが明確に伝わるように、最終的に文書にするときは、意識しながら書くと良い。
- スポーツには「こういう素晴らしい価値がある」という啓発的な機能に加え、スポーツの価値というのは時代や文化、社会によって変わっていくので、隙間がある状態で提示できないか。「あなたはどんな価値を持たせるのか」という問いかけと「今はこういう価値があると言う人が多い」ということを並列すれば、より多くの人を惹きつけられると思う。
- 「こうあるべきだ」や「今は、こう思っている」ということは、5年、10年先は違う形になっていると思うので、そのような隙間や余裕があったほうが良いと思う。
- 啓発する部分と自ら考えさせる部分は、うまく常設展と企画展を使い分ける発想によって出せるのかなと思う。
- 確かに時代は変わることは事実としてあるが、心に残る、心にしみるものは時代を超えてずっと残ることもある。この秩父宮記念スポーツ博物館の使命は、心に残っていくものを示すことかなと思う。
- 今やスポーツや健康は、健康で長生きするために筋肉量を落とさない、炭水化物よりたんぱく質の摂取が重要など、人間の真実に向かっている気がする。JSC のハイパフォーマンスセンター事業は、人間の競技力を最高に高めようとしている。そういう医科学の真実というか、昇り詰めるギリギリのところまで世界はしのぎを削っており、そういうことがスポーツ博物館に来れば体験できる場でもいいかなと思う。